

令和3年 清流の国ぎふづくり大江川環境対策協議会 意見等

委員氏名・所属等	資料名	頁番号	意見等	回答
水野瑞夫 (岐阜薬科大学名誉教授/自然学総合研究所最高顧問)	資料1	22, 23	アオコの発生が少量のため分析が出来なかった。しかし、昨年度の調査によりアオコ原因種は主にミクロキテイス属であることから、Microcystis aeruginosaの既往研究記事を参考にして、無機元素としてはP, K, Ca, Mg, Na, Fe, Alが検出されていて、特にPの含有量が多いことからアオコの必須元素と考えられ、大江川のTP及び溶解性P濃度の高いことが、アオコの発生することを裏付けていることが解る。その他の元素にも特有な生理作用が示されているが、大江川での詳細な分析値が無いために参考にならない。詳細な水質分析が必要であると思う。	いただいたご意見については、今後の対策の参考にさせていただきます。
	資料2	1	尚アオコ成分のアミノ酸、及び有毒物質ミクロシスチンについて報告もあり。アオコレベル1程度の大江川でのアミノ酸が検出されなかったとあるが、アミノ酸はアオコ生体成分であり、水中に分泌されるものではないので当然検出はされないことである。 (反省と提案) アオコ発生の環境は気温(特に水面温度が1週間以上の持続)、日照時間、流域における高濃度の栄養塩類、特に総リン及び総窒素である。水面温度は滞留により高温が維持され、反対にウキクサなどの大量発生は水面温度を低下させるなど大変不雑であるが、それぞれの対応がアオコ対策として取られている。特に栄養塩類の減少には上下水道の整備、農産物の肥料対策が重要である。したがって詳細な水質検査の実行も不可欠事項である。最後の揖斐川導水が中止されているので其の代案が必要ではないか。例えば恒久的に井戸の開発による新しい水量の確保などである。	